

てではなく個別的な問題として寄与する可能性があることを指摘した。その際山田教授はトマスの全存在経験の解明が哲学史全体の記述をヘーゲルの意識主義から脱却せしめるであろうと言ひ、トマス哲学の歴史的研究が、そのまま新しい哲学史の可能性につながることを明確にし、稲垣教授は現代倫理学の対立（分析論的見解と自然主義的見解の善についての矛盾関係）を問題意識に取り入れて、トマスの哲学を研究することによつてこの対立を止揚しうる可能性を論理的に明確にすることを介して、トマスのテキスト解釈が歴史性を失ふことなしに、現代哲学の問題となることを示した。(3) これら3人の相互に対立する見解にもかかわらず、現代的意義を問ふ場合、司会者がなかば即興的に選びとつたかに見えたかもしれないところの経験と価値意識のふたつの問題が、実は3人のそれぞれの視座から語られてゐたのであり、それが具体的に彼らの意見を形成することになつてゐるのである。といふことは、トマス解釈の歴史的な問題として、トマスにおける意識乃至経験とは何かといふ研究の必要性と、現代、我々が価値をいかに考へてゐるかといふ我々の体系的思索の必要性、これらふたつの課題が、トマス哲学の現代的意義を問ふ場合に、その立場が松本的であれ山田的であれ稲垣的であれの別を問はず、共通に与へられてゐるといふことになるであらう。

なほ会場の一般席からの質問や発言が多少あつたが、適切な発言があつても、それらについて充分の時間が残されてはゐなかつたので、討論として浮彫られるまでに至らなかつた。それは司会者の責任といふことでもあつたが、3人の学者がそれぞれの考へをかなり充分に出し合へたことは、何と言つても有意義なことであつた。

## 提題

## 認識論と神学に関連して

松 本 正 夫

デカルトは意識一般の自明性から出発して意識論哲学を建設したのに対して、聖トマスは存在一般の自明性から存在論哲学を形成する。ハイデッカーやヤスペルスなどの現代哲学もデカルト・カント以後の意識論哲学の流れのもとにあるので、そ

れとの対比においてトマスの存在論哲学を考察することは、いきおいトマス哲学の現代的意義を問うことになるかと思う。デカルトは神学とちがって哲学は疑っても疑いきれないものから出発すべきであると、また私達に直接に与えられる意識の事実こそ自明であるとして意識論を第一哲学としたのであるが、ところがトマス・アクィナスに限らず、アリストテレスもそうであったが、実はデカルトが「方法叙説」で述べている「哲学は疑っても疑い切れない自明性から出発すべきである」という前段の主張で意見を異にしている訳でなく、ただ「私達に直接与えられている自明的なもの、それがまず意識である」とのデカルトの後段の主張とだけ意見を異にするため、彼らの哲学が意識論哲学にならず、存在論哲学になったのである。「存在は知性に最初に落ちこんでくる。」 *sic ergo primo in intellectu nostro cadit ens* とトマスの「形而上学註釈」 *Commentaria in metaphysicam lib. X, lect. 4.* にあるし、また「知性が最も自明なものとして最初に考えるところのもの、そしてすべての概念がそれに解消されてしまうところのもの、それが存在である。」 *illud autem quod primo intellectus concipit quasi notissimum, et in quo omnes conceptiones resolvit, est ens* とやはりトマスの「真理論」 *Quaestiones disputatae de veritate q. I., a. 1.* にある。トマスが哲学をこの自明であるとする存在から出発させる限り近代哲学の祖であるデカルトの方法論的格率に何ら違背していない。

そこで存在の自明性と意識の自明性とどちらが先かという点で、前者を先きとするトマスと後者を先きとするデカルトの違いがでてくる。先に述べたトマスの真理論の同節には「存在を意識する人はだれでも、意識する意識の働きを意識するわけでない。しかし意識の働きがなければ、いかなる存在を意識することもできない。」 *sicut nec quicumque intelligit ens, intelligit intellectum agentem; et tamen sine intellectu agente homo nihil potest intelligere* とある。これは存在を直接に意識する、即ち、存在の自明性がなりたつために必ずしも意識を直接に意識する、即ち、自意識における意識の自明性がなりたつことを必要条件としない、しかし存在を意識する意識の存在のみは不可欠条件であるというのである。そしてこれは哲学という学問に関する限り存在の自明性が意識の自明性に先行し、この存在の自明性の成立に意識の自明性は決して不可欠の前提とならないことを示し、結局、意識の自明性にもとづく意識論は意識存在を自らの一部とする存在一般の自明性にもとづく存

在論に後行するものであることを意味しているのである。

これはデカルトと大変違ったスコラ哲学の考え方で、遠くアリストテレスに源を発している。アリストテレスの存在論によると存在一般の一部としてしか意識は考えられないので、意識存在が直接意識に与えられるいわば自意識のもつ自明性は存在一般が直接意識に与えられる「存在の意識」のもつ自明性の派生現象として、この「存在の意識」の存在に意識を代入して「意識の意識」とした場合に生ずる特例的なケースなのである。もちろんアリストテレスも存在そのものたる第一原因においてノエシス/ノエシヨース思惟の思惟というアプリオリな完全な自意識を認めているが、それ以外のすべての意識においては、意識は先ず第一に存在一般に向うもので、それが自らに向って自意識となり、自覚的になるのは本源的でなく、あえて副業的 *ἐν παρέργῳ* であるとされるのである。(Aristotelis metaphysica lib. 12 cap. 9) これに対してデカルトの考え方の背後には聖アウグスティヌスや中世のデカルトと言われているアヴィセンナという人達がいて、これらはいずれもアリストテレスの後にでてきた新プラトン主義の影響下にある。新プラトン主義の異質の起源について近年種々論ぜられている(例えば、Emile Bréhier: La Philosophie de Plotin 1961)が、意識と存在、ノエシスとノエマ、主観と客観の完全な自己同一を主張する絶対的自覚意識の、発出論理にもとづく世界内への流出派生を説くもので、このような自己完結的な意識構造が「感覚からその意識を始めるもの」についてもアプリオリに当てはまるという考え方である。そしてデカルトやカントの近代のアプリオリズム(先験的観念論)に正にこのような精神伝統の復活を見ることが出来る。これに対し存在論的認識論は本来のギリシャ哲学の伝統に立って「感覚に始まる意識」の非充足未完結なエロース的な構造を洞見しており、ここにアリストテリコ・トミズムのもつアポステリオリズム(経験的实在論)の現代哲学に対する特別の迫力(インパクト)を感じとることができると思われる。

次に感覚から出発する意識存在の比例的対象 *objectum proportionatum* は物質で、自意識存在の比例的対象は精神であるという問題に移ろう。ここで比例的対象とは認識者の在り方に適合した認識対象のことである。従って感覚に始まる人間意識にとって適合した比例的認識対象は物質存在であるが、完全な自意識存在があるとすれば、その比例的対象は精神であって、これがデカルトでの *res cogitans* に

当るかと思われる。しかし身体的である限りの精神にとどまる人間にとって意識は直ちに自意識ではなく、従って精神は類比的対象 *objectum analogatum* に留まり、充分に比例的対象となることはない。これはトマスの認識論の非常に重要な点である。我々の自意識は完全でなく、あくまで身体的な精神に留まるので、デカルトやカントは人間理性を天使の理性と間違えたのではないかとジャック・マリタンは述べている。従ってトマスの存在論に於いては存在一般とは比例的対象を部分として含む存在の類比 *analogia entis* によって認められる類比的対象の全体ということになる。しかしその際、存在の類比の出発点になるのは、あくまで比例的対象である物質的存在である。聖トマスの認識論では感覺的物質的对象を基礎とし、そこで抽象によって獲得した範疇的な本質概念を「存在の類比」によって感覺的経験を越えた反省的経験の世界に類比的に拡張できるとし、そのことによって可能となった「意味付け」ないしは「解釈」の中にこの新しい表現的存在の地平にその固有の検証性格を見出してゆくのである。

トマスはその哲学的著作 *De ente et essentia* では感覺的世界での質料・形相の合成実体から議論を始め、次に単純実体、即ち、形相のみである離存形相を扱い、あくまでも「下からの存在の類比」を貫いている。つまり有形的な質料・形相の合成的物質存在での範疇的存在様式である実体とか属性とか偶性とかそうしたものを、純粋形相としての無形な天使的存在、あるいは叡知体に類比的に拡張してゆく。天使的存在や叡知体には主語的基体としての実体とそれの述語である属性や偶性などとの間に分離がなく、従って比例的対象としての物質世界においての主語に対する述語の関係、即ち、述語は主語に依存するという主語主義は必しもそのまま妥当しないのであるが、それでもここに「述語は直ちに基体化される」という「ポエティウスの法則」を適用して、あくまで主語主義の立てまえを崩さない。ここで叡知体という純粋な形相実体がこのような類比的対象から本当に比例的対象となるためには今度は私達自身が完全な自覚に目覚めなくてはならないが、それは身体的人間にとって通常行われえない。そのためには人間的意識存在自身がどうしてもその本性を超えた本性以上の状態 *status praeternaturalis* に置かれなくてはならない。さらに離存形相たる純粋精神どころか純粋実存である神の存在とその属性を扱う自然神学について、確かに神の存在とその属性証明は推論的類比的認識に入りえても、神

の本質そのものは自然的理性にとって完全に超越的であり不可知である。その意味で我々が持っているところの比例的対象を含めた類比的対象の全体である存在一般とこれとの間に一つの大きな不整合性があることをトマス自身も充分認めていたと思われる。

神の本質についての神の自己啓示を受容するために意識存在そのものの恩寵による超自然的高揚がどうしても必要で、その高揚の結果、存在一般に対する自然的理性の視野が例外的に拡張されてゆくという問題となる。神の本質知は神愛という神の自己啓示を受容する以外に不可能で、それは天使も含めて一切の被造的な意識存在が単に本性外的 *praeternaturaliter* ばかりでなく、恩寵によって超自然的 *supernaturaliter* に高揚され引揚げられなければならないことを意味する。この引揚げは恩寵による愛の一致であり、それは自然的本性を適性 *habitus* において引揚げることで、その際、被造物のもつ自然的本性は破壊されない。かくて自然的理性の存在一般に対する視野は自然的認識以上に例外的に拡張される。つまり比例的対象と類比的対象との全体が拡大され、意識存在がその本性を維持したまま適性的 *habitualiter* に高揚される。そしてこれが「恩寵は本性を破壊せず完成する」 *gratia non tollit naturam sed eam perficit* という意味である。

私はこうした考えが結局トマス神学に即したトマス認識論の要点と考えるが、ここに従順能力 *potentia obedientialis* の問題が登場する。我々が通常、可能態 *potentia* において有っているのは我々に固有のもので、それはいわば自然的能力そのものであるが、この *potentia obedientialis* ということ<sup>1)</sup>を聖トマスが言うときには超自然の恩寵に対する従順能力のことしか考えられていない。それは結局、人間ないし天使を含めて被造物といわれるすべてが「無から創られた」もの *creatio ex nihilo* であることにかかわっている。トマスが自然的認識に、神の存在とその属性についての推論的類比的認識を認めても、神の本質についてはいかなる自然的認識もありえないことを主張したのは、「無からの創造」を含む創造神学をその啓示神学 *doctrina sacra* の根底に前提していたからである。「無からの創造」は最初の無償性 *gratia primoris* とも言うべきで、それは超自然と自然の区別を前提せずに理解されない。最近の神学、例えばカール・ラーナーにおいて、与えられた現実が既に超自然である故、超自然と自然の区別は理坳的概念的区別 *distinctio in*

ratione にとどまるとし、実在的区別 *distinctio realis* の考え方はだいぶ旗色が悪いが、実は両者の区別は被造世界に対する神あるいは創造者の絶対的超越性、即ち、被造物と創造物との間の実在的区別 *distinctio realis* 以外にその根拠を見出せないもので、またこれなしには *creatio ex nihilo* という創造神学も発出的因果論に墮してしまうのである。さもあらばあれ原始恩寵を告げしらせる創造神学には既に「存在」の超自然的無償性を告げしらせる福音的性格が保証されているのである。

## 提題

## トマス哲学の現代的意義

山 田 晶

トマス哲学は、それ自体としていかに豊かな価値を含んでいようとも、その価値を現代において理解し、現代の哲学的状況のうちに現前せしめる研究者が無いならば、図書館の片隅に空しく埃をかぶっている古書の集積にすぎないであろう。それゆえ私は、トマス哲学の現代的意義という問題を、トマス哲学研究の現代的意義という観点から考えてみたいと思う。それは次の三点にしばられる。

(1) トマスは、教会の内部に若干の熱狂的信奉者を有しているが、しかし現代哲学の全体的見地からみるならば、むしろ無視され、黙殺され、或いはきわめて低く評価されているというのが、いつわらざる現状であろう。しかしながら現代の哲学者たちのトマスについての見解と評価とは、彼ら自身のトマスについての深い研究にもとづくものではなくて、多くの場合、先入見と浅薄な誤解にもとづくものである。他方、熱狂的なトマス主義者たちも、広く深い哲学史的視野の中でこれを正しく理解しているとは限らない。多くの場合その反対であって、彼らの浅薄なトマス論は、却って好もしからぬトマスについての先入見を流布するために役立つのみである。

このような現状において、トマスの著作をあくまでもテキストに即して正確に理解し、また彼の体系のうちに含まれる豊かな哲学的諸概念を、古代から始まりトマスに到る歴史的発展の相において把握し、その成果を現代の学界に現前せしめるこ